

令和7年度 第4回北九州市社会教育委員会議(要旨)

1 日 時:令和8年2月6日(金)10:00~11:40

2 場 所:生涯学習総合センター 3階 ホール

3 出席者:委 員 野依議長 他 13名  
事務局 地域・人づくり部長 他 3名

4 議題、議事の概要

(1)総務市民局 地域・人づくり部長挨拶

(2)議長挨拶

(3)議題

次期「北九州市生涯学習推進計画」策定について

(4)その他

5 主な質疑応答、意見等

(3)議題

次期「北九州市生涯学習推進計画」策定について

事務局:《次期推進計画について説明》

委 員: 多文化共生について、具体的にはどのようなイメージか。

事務局: 外国人、障害のある人とのインクルーシブ的なものを考えている。

議 長: 外国人労働者とか、留学生とかを念頭に置いている。地域住民の方と外国人の方たちの相互理解が、地域づくりには必要と考える。

委 員: 28 ページの持続可能な地域づくりに向けた地域力の育成の取組のキーワードの中に、地域デビューとあるがわかりにくい。どの世代のことを言われているのか。

事務局: 主体的に関わっていただきたいという思いがあるので、小学校の高学年とか中学生とか、何か地域活動に自ら関わっていただければと考えているが、具体的には決めていない。

委員：正直なところで、地域デビューとすると壁を作るような気がする。もっと自然に溶け込むような社会になって欲しい。

委員：28 ページに地域のつながりを生かした家庭教育支援とあるが、イメージがつかない。

事務局：すでに実施していた家庭教育講座を改めたもので、市民センターを中心に、地域・家庭・学校が協力して取り組んでいる。

委員：多文化共生だが、地域デビューと重なるところがあるが、いろんな国の方と共生できたらいいと思う。

委員：言葉の付け加えになるが、28 ページの持続的な地域づくりに向けた地域力の育成のキーワードの中で、社会参加の後に、参画という言葉を入れておいた方がいいと思う。地域づくりには、主体的に関わってもらいたいということになると、社会参加は、プログラムがあるところに加わるという形で、参画になると、プログラムを作るところから取り組んでいく。社会参加・参画と明記して欲しい。

議長：計画策定の最終段階なので、さらに議論を深めたい。隣同士の委員で意見交換をして欲しい。

#### 【席の隣同士の委員で意見交換】

委員：25 ページ及び 28 ページにあるキーワードは、何を表しているのか。これが取組の基になっているのであれば、それと対応するものがあるのか。8 ページに、対話というところがあって、それが取組の中に入っているようには見えない。言葉の質が違うものが横並びになっている気がする。

事務局：キーワードに関しては、これまでの次期推進計画を考える社会教育委員会議のグループワークの中で、これから社会教育、生涯学習を進めていくにあたって、重要になるだろうと考えるものを挙げているものである。キーワードが直接、事業として見える形になっていないものもあると思う。例えば、対話については、事業そのものを行っているかというところではなくて、対話を重視した取組が大事というふうに考えている。言葉の質については整理をしようと思う。

委員：市民センターの利用について、平日は仕事があるので、日曜日・祭日を開館して欲

しい。

事務局：担当部署が議論を始めているところであり、動きがあれば情報提供したいと思う。地域の方々と丁寧に議論して、より幅広い世代の方が使えるような環境づくりに取り組んでいきたいと考える。

委員：公民館・市民センターに勤務していたので、地域デビューという言葉も、何の疑問もなく、1人でも多くの方にデビューしていただきたいという気持ちでこれまで来た。それが一つの壁になっているんじゃないかという意見を聞き、そうした考えに気がつかなかったなと思った。また、幸福度の低さ、孤独と孤立については、もっと働きかけなければいけないと感じる。

28ページの2026年から2030年の重点的な取り組みとして、若者が市民センターに関わる仕組みづくりということで、今、北九大生とか関わっているが、制度化とはどういうことか。

事務局：例えばボランティア組織を若い人たちで組んでいただくとか、市民センター等に関わる機会が増えるような取組ができないかと思っている。

委員：A3資料の目指す未来について、次期推進計画と地域コミュニティビジョンと歩調を合わせとあるが、どのようにしているのか。また、市民が見たときに、人づくりという言葉がいいのかと思った。

事務局：同じ部内の地域振興課と連携して取り組んでいる。人づくりについては、言葉の選択等については、検討させていただきたいと思う。

委員：地域デビューについては、主体的に関わる小中学生を想定していたということだが、中学生も、ボランティアで市民センターの催しに出ることがある。そこで良い経験をすれば、もう1回、次来てみようかとなる。行ってよかったとなると、それが2回3回重なって、やっと参画に入ると思う。最初はボランティアなんかできるかなと思って探しているところから、顔見知りになって、名前を覚えられて、頼りにされて、参画という段階があるんじゃないかなと思う。ボランティア活動では、名前と呼んであげて欲しい。

委員：幸福度が低いというのもすごく気になる。フィンランドに去年行ってきた。幼児教育施設を見たが、子どもは自分で何でもやれるように、自立ができるような構造になっていた。大人も、指示命令することなく、子どものことをよく見ながら、何かあれば手を差し伸べるというような関わりをしていた。

事務局：「指標の考え方について説明」

委員：福岡県社会教育課を通じて、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターから情報をいただいたので、今後の参考にしてもらいたい。

委員：ちょっと資料の見方が理解しにくいところがある。例えば基礎数値。基本方針があって、対象者が講座参加者で、調査内容がこうだったと。この基礎数値というのは今までやったことに対する評価、90%の人が評価してますよというふうに、理解したらいいのか。この辺で言うと一番下の13%。非常に課題がある。それから、ビジョンの構成について、言葉は悪くないが、流れが我々の世界で言うと、まさに最初にビジョンがあって、それから行動を段々下していくわけだが、多少読みにくいと感じる。

事務局：前提の説明が少しあやふやなままに進んでいることもあって、わかりにくいかもしれない。例えばM.V.V.の考え方、ミッション(果たすべき使命)、ビジョン(目指す姿)、バリュー(行動)がある。新しく生涯学習を推進するにあたってのミッションは、いかに自分ごとにしていくかということになる。そのためのビジョンは、具体化の刷新。これをバリュー、具体的にどういう行動に移していくのかということが今後問われる。

具体的な事業計画の部分については、毎年継続してやるものもあるし、見直しをする部分もあるので、個別個別で考えていきたい。

委員：この基礎数値というのは、結果的に、これは非常に評価されてるというふうに読むわけか。

事務局：案として示しているのが、その個別具体の取組をするにあたって、取組の成果もちろんあるが、やはり取組の1個1個を突き合わせていくのはなかなか難しいので、ビジョンに沿った形の個別具体の取り組みの成果を見ると、例えばこういう講座参加者の方に対して、こういう調査をして、その結果が今までの数値より上がっていれば、ビジョンにより近づいていってるじゃないかという判断をしたらどうかという提案を今回させていただいている。

委員：だから、今日の話は全体の言葉の話で、この各論に入った時に、どういうことをやるのかを聞きたい。その予定というのは、いつになるのか。

事務局：社会教育委員会議を毎年開催させていただいているので、その中でやっていくことと結果の報告をしたい。現在の推進計画では、個別の事業の効果検証にはなるけれども、全体を見据えたときに、より目標に近づいているのかわかりにくいと思うとこ

ろがあるので、次回推進計画では、こういう個別事業をやる予定だと説明した上で、結果の検証を行い、個別事業のそれぞれがどうだったかというよりも、今示してるような大きな指標を見ながら、ビジョンの形に近づいているかどうかの議論をできるようにしたいと思う。指標の例にこだわってるわけではなく、もっとわかりやすい指標があれば、お話をいただきたい。

委員： 8ページの指標について、調査内容にある『生涯学習総合センターや市民センター等での』は、5行とも全部同じであるので削除して、シンプルにした方が読みやすいし、伝わりやすいと思う。

議長： ほかにいかがか。これまでは、目標値が何パーセントとか、何人参加したとか数字を目標にしていたが、それだけでは図れない成果とか良さというものがあるだろう。

委員： これはこれで説明を聞けばわかるが、数値目標というのは非常にわかりやすい。数字で測れないものもあるが、やる結果がどうなったかは大事になるので、数字で置き換えられるものは、やっぱりその数字であった方が、そのあとのPLAN、DO、CHECK、ACTIONを回しやすいじゃないかと思うので、参考にしていただきたい。

議長： それはちゃんとやっていただけるということでよいか。

事務局： はい。

委員： 質問だが、生涯学習というのは、A3資料の学びのニーズにある、いつでも、どこでも、気軽に学びたいとか、変化の激しい社会に対応していきたいとか、豊かな人生を送りたいというふうなことが、思う人からのものか。生涯学習とは、ゆりかごから墓場までじゃないのか。文部科学省は、小学校からの自覚的な学びの前の学びの芽生えという、乳幼児期をすごく重要視して、そこが基礎になっていると言われているが、学びの面で、それが入っていない。だから、意識できる自覚的な学びをすところからしか入らないのかと思ったのだがどうか。生涯学習というのは、これを見ると意識ができる、自覚的に学びたいというところからしか入らないのか。小学校低学年は、もしかしたら入らないのか。

事務局： 教育的、学習的なものだけではないと考えている。例えば、市民センターのボランティアの方とふれあうみたいなのところも学びだと我々としては認識している。学びたいというだけでなく、結果として学んだという状況も生涯学習に含まれると考えている。